

交叉点 24

明高24回生通信

20th/Feb. / 2021

No. 19

近況報告

3-9 前田正英



2020年10月24日に河合昭彦さんから「400字詰原稿用紙3枚から5枚程度で思い出とか近況など何でもいから交叉点24に原稿を」とメールを頂いた。

いつも同窓会活動に献身的な河合さんからの依頼を断るなどをもっての外であるし、声掛けを頂いたことに感謝して、今回、寄稿することとなった。新型コロナウイルスは、年が明けても更に予断を許さない深刻な状況が続いている。今後のワクチン接種への期待と各人一人ひとりの更なる感染防止策の徹底で、今より少しでも状況が良くなることを祈りたい。

2020年に予定されていた会合は、24回生の同窓会をはじめ、ことごとく中止となった。また、家内が65歳になり勤めていた会社を退職する年であったので、ドイツに住む友人のところへゆっくり遊びに行く計画をしていたが、これも当然行けなくなり、さびしい限りだったが、12月にGoToトラベルを利用して間人の「炭平」に行ってきた。間人蟹のフルコースは予想を裏切らない美味しさで、感激して元気をもらって帰ってきた。

2021年の家族のお正月のお祝いは、灘区在住の娘家族は我が家に来たが、横浜在住の息子夫婦は移動自粛で帰省しなかったので、息子の提案でZoom(Web会議システム)を使って行った。とても簡単で、使い勝手もよく、2時間があっという間に過ぎ、リモートではあったが、従来通り家族そろってのお祝いできた。

さて、現在の私であるが、35歳の時に思い切っ

て転職した不動産会社も65歳を迎え無事退職したあと、少しゆっくりした後、リタイヤするには少し早いと思ひ、須磨区で兄がやっている不動産会社に席を置いて、週4日程度、顔を出している。NHKの朝ドラを観て、ゆっくりしてからJRで拙宅のある摂津本山駅から鷹取駅までゆっくり座って車窓から今度の休みにはどのルートから登ろうかと六甲山を眺めたり、スマホを見たり、本を読んだりして午前10時前に出社し、午後4時頃までには退社している。出社して、契約書、物件調査資料を作成したり、管理物件の請求収納業務などをやっている。

休みの日には週1回程度、車窓から眺めていた三密にはならない六甲山系のトレッキングを楽しんでいる。六甲山系は、東西に長く200m程度の低山から最高峰931mまで、バリエーションに富み、登るルートがいくつも有って、桜、紫陽花、紅葉はもちろん、冬には積雪、一部の滝も凍って、四季それぞれ、いつ登っても飽きない山である。咲いている花を見ながら、鳥の声、沢を流れる水の音を聴きながら、のんびり自然に触れ楽しんでいる。

人生の折り返し点は、とっくに過ぎているし、これからも、のんびり過ごしたいと思っている。

24回生の同窓会は次回「古希祝い」を兼ねての開催ということで、ちょっと先ではあるが、是非、元気で参加したいと思っている。

最後に、河合さんはじめ、同窓会活動を盛り上げていただいているに方々に心から感謝し、拙文を終わりたい。(2021年1月吉日記)

TOKYO 2020

3-10 大西和彦



1964年 の東京オリンピックのキャッチコピーは「より速く、より高く、より強く」であった。高度経済成長を目指していた日本にとってまさにぴったりの目標であった。

ところが TOKYO 2020 オリンピックは新型コロナウイルスによって世の中が一変してしまった。いろいろなものが見えた。人間の目指しているものは何なのか？

デジタルの世界か？ ドッグイヤーと呼ばれる急激なデジタルの進化なのか？

デジタル化は一気に進んだといわれるが、その他の面では、コロナにより急ブレーキが踏まれたのではないだろうか。

いや、ある意味立ち止まって考える機会が与えられたのではないか。スローライフの良さ本来の人間の求めていたものに気づく機会。2020 のキャッチコピーは「スローライフに加えて楽しさではないか？ 日々 楽しく暮らすそんな世の中を目指せと

温故知新の言葉をかみしめると何かしら忘れていたものがありそうだ。

街のあちらこちらにいにしへの遺構を見ることが出来る。また、最近、時代劇が面白く感じて好んで見るようになったのは歳のせいだろうか。そこには何かしら忘れていたものや、人間の尊厳や品格にかかるものがあるように思える。街並みについても近年の金太郎飴のような街並みではなくその土地固有の風土に合った街並みがあった。

今年、江井島小学校が 150 周年を迎えることになり、微力ながら手伝っておりますが、古い資料や写真を見ているとまさに先人のワイワイと楽しく生活していた様子を想像できる資料が多い。時代時代に人は楽しみを創造して暮らしてきているのがよくわかる。

コロナに遭遇した我々ではあるが、何かしらこのような時代だからこそその楽しみかたが色々できそうだと。

かつて、ある社会学者の人が人間が共有できる移動速度は時速 15KM までだと、言っていたことを考えるとスローライフな時代の良さは生活速度を見直すことかと思う。例えば、歩いている人とジョギングしてる人は同じ空間を共有できる、OK である。しかし車に乗っている人や電車とは次元が異なってしまう。落語に登場する籠や屋形船と道行く人は OK である。そういうことであれば、路面電車や馬車程度はいいのかもと思う。同じ空間で楽しく共存可能である。歩行者天国や露店が面白く楽しいのは空間を共有できるからかも、現代にスローライフな空間を作れば、そこに楽しさが生まれるのではと思う。

親水施設や公園、広場の価値がこのコロナの中で人気な理由もわかる気がする。

何気にふと、思いついたので文章にしてみました。今年のキーワードは「楽しさ」と勝手に決めました。

故郷を離れ長崎で蜜蜂と暮らしています

3-8 福岡 洋典



今は、長崎の山の中で蜜蜂を育て、蜂蜜を販売して暮らしています。なぜ故郷の明石を離れ、縁もゆかりもない長崎の、それも山の中で蜜蜂を育てながら暮らすようになったのか。25年の年月を振り返りながら書いてみたいと思います。お時間が許せば、お付き合いください。

1995年、忘れもしない阪神大震災が有り、サリン事件があった年です。あの頃 42 歳、私は日本航空の東京支店に勤めていました。ある日、上司から「次はどこ職場が良い？」と訊かれ、「私の世界地図の中でヨーロッパが白地図なので、ヨーロッパに行きたいです。知るには住んでみる

のが手っ取り早いと思うので」と答えたら「わかった、じゃ探してやるよ」

数日して、この上司から「ロンドンとシドニー、どっちが良い?」「シドニーは、ヨーロッパじゃないですよ」、「英語圏で同じようなもんだろ」、「うーん、ちょっと考えさせて下さい」。あの頃のロndonは、サッチャー政権の直後、まだまだ政治・経済で世界の中心だった。かたや、シドニーは、世界の田舎。ではあるが、短パンでお気楽ゴルフも魅力だなあと決めかねていた。それにしても、すごい交渉力のある上司である。

結局、「ロンドンに行け」ということで、一度も行ったことがないヨーロッパのロンドンに10月末の赴任となった。香港で2年暮らしたとはいえ、持っているのは社内規定すれすれの英検2級。実力も2級+アルファ程度。それで同僚の女史にお願いして「着任スピーチ」を書いてもらい、ロンドンへ向かう機内でブツブツ、丸暗記。功を奏して着任当初は、で・き・ると思われたらしい。

そして知らない人ばかりのロンドンに着任。歓迎会の流れでパブに行き「イングリッシュ ピープル・・・」と言うと、「アイ・アム アイリッシュ」「アイ・アム スコテッシュ」。あれ、みんな同じイギリス人じゃないの? それを言いたいなら、ブリティッシュだよと教えられた。タスクは、イギリスとアイルランドのセールスで、価格決定から販売促進活動までの全般。思い返せばちょうどあの頃、ロータス123や一太郎からマイクロソフト エクセルとワードにシフトしている時期だった。なれぬソフトでの資料作りに夜を徹して格闘した。仕事は山積み、住む部屋も探さなければいけない。無駄口を叩く同僚もまだ居ない。冬のロンドン、外は曇りか雨の憂鬱な空模様。路上で誰かが吹く勇ましいバグパイプの音に励まされた。

そんななか、私の赴任より数カ月遅れて、東京支店でいっしょだった3歳上の先輩が、パリに赴任してきた。久しぶりに会おうということで、息抜

きにパリへ。パリの街に着いた途端、「間違えた。あと数ヶ月遅かったらパリだったかもしれない」と後悔した。いや、そう思いたくなるくらい、冬のロンドンとパリは違っていた。ロndonは曇ってどんより暗く、かたやパリは寒くてもカラッと青空。そして、街並みのトーンがぜんぜん違う。ロndonは、シャーロック・ホームズの気難しいねずみ色の雰囲気をもっているのに対し、パリは、フランス・ギャルが歌う「オー シャンゼリゼー」そのもので、パーと明るい。

ロndonでの仕事は、日本での大組織と違い、私のセクションでセールス全般をこなすためオールラウンドに動く必要があった。宣伝など新しい分野も多く、セールス全体を作り上げる楽しみがあった。

販売促進活動として、在英日本企業を対象とした年次ゴルフ大会、日本から文化人を招聘しての文化講演会など。英国人マーケット向けには英国旅行代理店を対象としたパーティーなど。これらが、半年に一度くらいめぐってきた。また半期に一度、欧州営業会議が域内持ち回りで行われ、それが楽しみと季節感を与えてくれた。

講演会に招聘する文化人の手配は本社が行うが、当地ロndonでの会場設定、聴衆への宣伝告知、及び運営は全て私のセクションで実施。司会進行は、いつもぶっつけ本番でなんとかこなした。お話を頂いた講師には、作家の浅田次郎さん、深田祐介さん、版画家の山本容子さん、日本人初のパリコレモデルの松本弘子さんなどがおられた。

企画運営の地味な裏方仕事だけでなく、講師の空港送迎や、お食事を一緒にしたり、お世話をさせていただきながらいろいろ見聞を深めることもできた。特に覚えているのは、浅田次郎さんで、不躰な質問をした。「よく映画やテレビで小説家の人が行き詰まり、イライラして紙をクシャクシャポンと投げるところがあります。浅田先生もあん

な感じですか？」「いや、全く違うんだよ。僕の場合はペンをとったときには、全てストーリーができてから、字を書く手の動きが遅くてイライラするよ」とすると奥様が「両手で書きたいらしいですよ」となかなか聞けない話も伺った。

英国留学をしている日本人学生の支援のため、彼らが催すジャパンナイトへの協賛なども手掛け、同じスポンサーとして来ていた英国人ビジネスマンや政治家との交流もできた。

この他、日英協会の催事出席、政府専用機の天皇・首相フライトへの空港アテンドなど、欧州の中心ロンドンならではの貴重な経験も積むことができた。

私生活はというと、今思えば6年も居たのだからイギリス・アンティークの勉強でもしておけば良かったと悔やまれるが、大半がゴルフ。そしてゴルフの後に足を伸ばす郊外ドライブ。ロンドンは、30分も車で走れば緑多い郊外の田園風景で、英国人の理想の生活は、田園を家族と犬を連れて散歩すること。その様子を日本人仲間とゴルフをしながら横目で見て、次第次第に田園生活への憧れが強くなり、ゴルフ場の帰りにはコッツウォルズや、ヘンリー、マーロー、はたまた遠くの村々まで出かけた。東京暮らしのときには最高と思っていた「鍵ひとつでどこにでも行けるマンション暮らし」から、「ゆったりした田園暮らし」に思いがシフトしていった。

さて、ロンドン駐在も6年の月日が過ぎ、ミレニアム問題も落ち着いた2001年。帰りたくないと思っていたところに帰任話が来た。それまでの転勤話は、成田空港、香港空港、東京営業、ロンドン営業と全て希望が叶ってきた。しかし、今度は、昔のようにトントン拍子には進まなかった。というのも、高齢の両親がいる明石に近い大阪か神戸に帰りたいたいと言う私の希望に対し、空きがないとの返事。それで、長崎はどうか？ という。ロンドンから見ると同じ西日本だから、ま、良いか。という軽いノリで承諾。

ロンドンで後任に引き継ぎをして、引越荷物を出して。さあ明日帰国という9月11日、事務所へ挨拶回りに行った。休憩室で同僚女子がお茶を飲みながらTVを見ていた。飛行機がビルに突っ込む場面が映っていたので、昼間からブルースウィリスの映画か？と思いきや、彼女が「It's News」と言う。えええ。2001年9月11日、アメリカで同時多発テロが起こったのだった。その日は、アメリカに向かった飛行機は全便引き返し、ヒースローはおろかイギリス国内、いや世界中の空港はてんやわんやだった。この騒ぎのさなか、まだなれていない後任が心配だったが、会社からは帰国延期の通達もなかった。翌12日、帰国のためヒースロー空港へ。入り口には戦車や機銃を構えた兵士がならび大変物々しかったが、帰国便はオンスケジュールで飛び立ち、翌13日無事日本の土を踏むことができた。

長崎での会社生活は、福岡支社の傘下で、支社を通して本社の指示通りに動くことに尽きる。工夫や裁量の余地はなく自分のクリエイティブティを発揮する場面がない。今思えば、ロンドン在任中に英国航空がスタートした「ゼロコミッション」から始まり、国際線の激しい競争で各社eコマースへ大きく舵を切り始めた頃だった。人による営業からインターネットによる販売の手探りを始めたのだ。

長崎での私生活はというと、休日はドライブに出かけることが多くなった。というのも、長崎は細長いリアス式海岸が多く大変風光明媚なところで、少し走れば、東シナ海から大村湾へ、そして諫早湾、有明海、橘湾と目まぐるしく山と海の景色が変わる。そして、海の水が綺麗だった。

着任後しばらくして、人づてに同じ大学の大先輩が、定年退職後長崎へUターンして田舎暮らしをしておられると聞き訪ねた。山の中腹で大村湾を一望する、それはそれは素晴らしい眺めの場所だった。野菜づくりに励まれ、鶏を飼い、暮

らしておられた。その敷地の一角を貸してあげるからまず草を刈って野菜でも作ってみたらと言われ、何故かやってみる気になった。今まで振っていたゴルフクラブを鍬に持ち替え、振る方向を横から縦に変えた。家内は札幌とロンドンしか住んだことがなく、「地下鉄のないような田舎には住めない」と言っていたのに鎌を握って楽しそうに草刈りをするようになった。

その先輩の言葉がなぜか耳に残った。「土地さえあれば、何があっても生きていける」と。50歳を間近に控え、定年後のことが頭の隅にあったので、新鮮な響きを感じた。そうだな、原点に帰れば、菜っ葉でも食って生きていけるか、と妙に安心した。そうすると、今まで気がつかなかった定年帰農や就農という文字が、雑誌や新聞の紙面で目につくようになった。きっかけは立て続けに起こった。先輩の近くに20年放置されたみかん畑があり、売っても良いと言っている、というのだ。広さ7反というから2100坪、価格は100万円程度だったと思う。すぐに住むつもりはなかったが、この風光明媚な土地に「someday いつか」住むなり、遊び小屋をつくるなどしてみたいと思った。英語で言う「one day いつか必ず」とまでは、考えておらず、いつかそんな時がもし来たら、と。

そんな長崎勤務も3年が過ぎ、東京に戻るようになった。朝の通勤電車で吸い込まれ、目的駅で吐き出され、そして本社ビルに込まれ、夕方吐き出される。人々の流れのひとりになった。住まいは、多摩川近くの借り上げ社宅で、近くには小さな公園があった。朝夕は、お年寄りが集まり何をしてもなく話をして、食事時には帰っていく。そんな様子を見て、長崎のお年寄りも、畑とかいろいろやることがあるが、ここではすることが無いなと思った。またこの頃、書店の店頭には、「直下型地震」「帰宅困難」に関連した書籍が山積みになっていた。大都会は、ひとつ問題が起こると自力ではどうにもならないな。という思いがひしひしとしてきた。

日本エアシステムと合併した頃で、統合本部の人事にいる後輩に時間を作ってもらい、こんな疑問をぶつけた。お世話になった団塊の世代の先輩方も多くが退職され、その次の世代に当たる我々に活躍の順番が回ってくるかと。彼の答えは、会社はこれを機会にいきなり若返りを図るという方針で動いています、というものだった。機会があれば、海外支店長としてバリバリやりたいと思っていたのに。飛び越えて、いきなり若返りか。しかし、これで腹が決まった。これから先10年、大過なく定年を待つのではなく、自分のクリエイティビティを試してみようと決意した。次にすべきは家内の説得だと整理がついた。そしてある日、家内に「長崎に住もうか？」と何気なく切り出した。家内は驚いて「え、会社辞めるの？」その日はそこまでにして、そっとしておいた。それから1週間ほどしたら、家内から「長崎に帰ろうか」とOKが出た。彼女は、札幌育ちで東京には友達も少なくテニススクールに行くくらいしかすることがなかったのだ。これが、今回の東京勤務1年と会社勤務27年に終止符を打つ事が決まった瞬間だった。

52歳で早期退職をして長崎に行くことになった。今の言葉でいうと移住。

何をして暮らしを立てて行くのか？「土地さえあれば何があっても生きていける」としかまだ答えはなかった。山の中腹にある荒れた土地を開墾し、イギリス風の石積みコテージをセルフビルドするのが私の夢だった。しかし、家内のひとこと「いつできるかわからないのは嫌だ」で却下。考えてみれば、気候が冷涼なイギリスと違い、長崎では石積みの家は合わない。ということで、イタリア風にすることにした。私がスケッチを描いてそれをもとに建設会社に家を建ててもらい、日本家屋とは違うので説明しても分かってもらえない部分は、自作することにした。節約になるし、少なくとも当分の間、時間はたっぷりあるのだから。

家本体ができて、庭にオリーブの木を植えよう

と思っていたら、オリーブの育て方講習会というのが有り、参加した。そこで講師が、オリーブの木は1本1万円の利益がでて将来有望である。しかし実がなるまでに5年かかる。子供を抱える若者には無理だ。60歳前後の人が育て、若者に引き継げば、仕事のない田舎で若い家族が生計を立てることができる、是非やってほしい、と言う。自分の家の庭木に数本と思っていたのに、その美談に負けて、近くの土地も借り400本ほどのオリーブを植えた。この時に、イタリアのトスカーナ地方から輸入した苗木を植えたため、ちいさなトスカーナという意味で、オリーブ農園 Poco Toscana と名付けた。

植えてから、オリーブの勉強を始めた。なぜ400本も植える前にやらないのか！！と自分



でも思う。それからの勉強と3年の経験が示したものは、長崎は降雨量が地中海の4倍も有り、風媒花であるオリーブの開花期5月に雨が降り結実が難しい。加えて、ここは雑草が激しく害虫の温床になる。結論は、無農薬栽培は無理。しかし、この無農薬栽培にこだわったのが功を奏した。オリーブは蜜蜂による花粉交配は要らないのだが、無農薬の証にと飼っていた蜜蜂が、美味しい蜜を集めてくれたのだ。森にある樹々の花の蜜が主流だが、この地域の植生が良いらしく、後味のさらりとした極上の蜂蜜が採れ始めた。まさに、捨てる神あれば拾う神ありである。

それで、オリーブ農園 Pocotoscana は、ハチミツ農園 PocoToscana として再出発。私が生産担当、家内がデザインや発送担当と自然に役割も決まった。2019年のゴールデンウィークから土日

限定のハチミツショップ&カフェもオープンさせた。私は、ミツバチの生態観察や得意の木工を、家内は好きなデザインや料理を楽しみながらオンライン・ビジネスとして続けている。販売や販促活動のノウハウは、ロンドン勤務でA to Z全てを手掛けたおかげと、あの頃の仕事に感謝している。

日々の暮らしはというと、毎朝、新聞受けまでの往復をスクワットなどのTABATA式トレーニングに当てている。ついてくる犬が、ボールを投げるとせがむので、時々投げてやる。朝食を取りながら新聞タイムを楽しむ。月曜から金曜は、天気により、蜜蜂の世話や巣箱の制作修理、草刈りなど外仕事をこなす。夕方5時位には、最近導入したテントサウナに火を入れて汗を流す。薪を焚べて15分くらいで熱くなるので、暮れていく大村湾を一望しながら至福のときを過ごす。土曜日曜は、ハチミツショップ&カフェをオープンしているのでお客様が来られても、来られなくても、ショップに張り付いている。来客が少ないときは、落ち着いてペーパーワークやじっくり行う仕事日にあてる。

春、秋は、ベストシーズンで仕事もはかどり気分も爽やか。夏が問題だ。ただでさえ暑いのに蜜蜂防具ですこぶる暑い、また、草が勢いよく生えるので定期的に草を刈らなければいけない。我慢の夏である。冬は養蜂家にとってオフシーズンで、新しい木工製品を作るとか、ツリーハウス制作の続きに手を付ける。また、大木伐採の情報が入れれば軽トラで引き取りに行く、薪割りをする。そんな生活で、やらなければならない事も多いのに、やりたいことがどんどん出てくる。食卓が、書類とパソコン、道具で山積みになり、家内が爆発する。

家内は、月イチで地方テレビ局の料理コーナーに出演している。料理は得意で、今まで各国で食べた料理をチャチャッと再現する。もちろんカフェの料理も彼女の担当である。

コロナ禍で休止しているが、workaway というプ

ラットホームを使いホストをしている。世界中から主に若者がやってくる。われわれホストはベッドと3食を提供し、workawayer は5時間くらいホストを手伝う。お金のやり取りはしない。ホストとしてプロフィールを作成しておく、世界中の日本に來たい人達が見て、オファーをメールしてくる。時期と期間、自分のできるスキル、人柄のアピールなどである。もちろん彼らのプロフィール画面も有り、チェックできる。お互い、過去のフィードバック評価も持っており、両者が合意すれば受け入れる。ざっと、そんな仕組みである。フランスから來た IT エンジニアには、壊れていたドローンを修理してもらったし、イスラエルの最先端野菜工場から來た若者にはハイドロポニクス(水耕栽培)のシステム構築をいっしょにしてもたった。中には、とんでもない人もおり、1日2日でお引取り願ったこともある。いままで、イスラエル、フランス、ポーランド、イギリス、南アフリカ、スペイン、ポルトガル、マレーシア、ペルー、アメリカから シングルやカップルでやってきた。ある時、同時に4人、3カ国から大男が來たときには食事の準備が大変だった。そのときは毎日雨、草刈りも何もできなかった。仕方ないので、長崎は今日も雨だったを教えてコーラスさせて暇をつぶしたこともある。子供、孫がいないので若者と話し、今どきを知る貴重な機会だ。

新しい物好きなので、最近のフィンテックや IT 技術の周辺にも触れようと、小さいビジネスにも関わらずキャッシュレスを導入したり、セールスフォース.com の情報管理システムにトライしてみようと取り組んでいる。ホームページは、河合さんにヒントを頂きワードプレスで構築中です。もうすぐオープンできるかな。「ポコトスカーナ」で検索していただければ、農園の現在の様子を Facebook や YouTube などに時々アップしていますので、明石高校 24 回生の SNS 同様に見ていただけると嬉しいです。ご興味を引いたら、コロナ後、遊びに來て下さい。

役に立たない話に長々とお付き合いいただきありがとうございます。

最後になりましたが、次回同窓会でお会いできるのを楽しみにしております。と同時に、皆様のご健康を祈念しております。

24 回生ニュース



3-5 山本(平松)昌子さんが、BK ラジオドラマ脚本賞で、最優秀賞を受賞しました!!□

2月27日午後10時、FMシアターにて放送されます。赤井英和さんが『なんどいや』とセリフを

言うそうです。

3年の文化祭で人形劇の脚本書いていたのを覚えている人いませんか? ネットで受賞したことを検索できます。

同期の仲間が輝いているのをお伝えしたくて!!□

(by3-5 岡崎(栗西)信子)



ありがとうございます。

もと3年5組の平松です。

授賞式以来3ヶ月、原稿の手直しや打ち合わせでプロの世界の厳しさと向き合いました。

今や、さらに高まったハードルの前で呆然と立ち尽くしています。

(by3-5 山本(平松)昌子)

<https://www.nhk.or.jp/osaka/event/radiodrama/>

より

2020年度 第41回 BK ラジオドラマ脚本賞 審査結果

NHK大阪拠点放送局(BK)主催の「2020年度第41回BKラジオドラマ脚本賞」は、年齢は19歳から80歳まで、141篇のご応募を頂きました。その中から、厳正な審査の結果、下記の作品を最優秀賞と佳作に選出しました。

この脚本賞は1980年から始まり、受賞者の中からは、BK制作の連続テレビ小説の脚本『ええによぼ』

を担当した東多江子さん、『芋たこなんきん』の長川千佳子さんをはじめ、『ゲゲゲの女房』『八重の桜』の山本むつみさんなど、テレビやラジオで活躍している多くの作家が誕生しており、次代を担う新人作家の登竜門として高く評価されています。今回の審査員、新井まさみさんも入賞者のお一人です。

なお、最優秀賞の『摩耶ぎつね』は、50分のラジオドラマ番組「FMシアター」として制作しNHK-FMで全国放送の予定です。

(2月27日放送されました)

事務局からのご連絡

・ネットでの会議システムを使って24回生同士で話せる場を検討中です。

「明石高校24回生のポータル」

<http://mokuzi24.dokikai.net/>

でご案内したいと思います。時々覗いてみてください。

「明石高校24回生のポータル」



・同様の主旨でLINEのトークルームを作りました。

・招待が必要です。河合 嘉のLINE友達になっていただくと「招待状」をお送りします。

河合 嘉



・住所不明者についてのお願い

- 1組 菊川忠男 岸本一朗 坂本隆彦 八木義孝
泉谷恵子 松尾洋子 2組 安藤悦郎 竹村郁子
長谷香代子 3組 北田雅福 高見訓司 土島日出彦 増子 隆 藤永みどり 秋定和子 平野由美子 鈴木佳子 4組 奥野好隆 田村政一 仲井 透 内田志津子 大泉尚子 尾坂尚子 山口哉子 5組 大村直樹 橋本成弘 長谷川俊広 山本和彦 魚住篤子 公森博子 坂本嘉代子 中川ゆかり 平山登志子
6組 近石 弘 西馬慎三 米谷嘉子 7組 塚原英成 辻 敏明 足立真知子 植田さち 近藤恵子 坂本京子 佐藤美智子 富岡るみ 森江真岐子 盛井雅子 8組 藤本雅之 諸岡宗司 山崎清孝 庄司真弓 加藤佐智代 田中英子
9組 浅田勝彦 魚住一裕 魚谷雅弘 加藤和宏
10組 青木賢一 木下孝一 黒田幸雄 西森正二 久山哲広 安尾弘文

2021年1月現在(敬称略)

心当たりの方がおられましたら、下記までご連絡ください



《連絡先》事務局

河合昭彦

〒674-0051

明石市大久保町大窪

1000-1

Tel 090-8659-

5628

Fax 078-934-1667

メール m24@dokikai.net